

『一年を振り返って』

佐々木 知子

光陰矢のごとし。年を経るにつれて年々、月日が経つのが速くなるが、今年も異様に速かった。本当に一年が経つたのだろうか。指を数えてみる。

二月、えひめ丸事故。四月、総裁選・小泉内閣誕生。七月、参院選。九月、同時多発テロ。この間、外務省詐欺事件（一月）、池田小学校事件（六月）、歌舞伎町大火災（八月）と次々に起こり、そして、昨年末の世田谷一家四人殺しからまもなく一年が巡ってくる。日経新聞の十一月十五日付「春秋」欄はこう書き出している。

「もう、十一月も半ばである。テロ事件のせいか、ことしは秋をどこかへ置き忘れてしまったような気がする。虫の声も、名月も、いわし雲もないまま、もう初霜の便りである。時間のたつのが速いというけれど、ことしは特に速く感じる。これも老化現象か。」

本当に、と二〇年来の友人に相槌を求めると、友人は首を傾げた。「それはあなたの生活が充実しているから」だと。そう言われて、心理学で習ったことを思い出した。時の経つ感覚は主観的なもので、楽しい時は速いが記憶では長くなり、一方退屈な時はなかなか経たないが記憶では速くなる。

考えてみると、国会議員も新聞記者も共に、大事件・事故が仕事に直結し、仕事量を増やし、風圧を高める職種には違いない。例えば、えひめ丸事故は首相退陣を加速し、池田小事

件は触法精神障害者の処遇問題に火をつけた。加えて私自身、五月に党女性局長に就任以降、全国行脚・講演が増え、一〇月以降は選択的夫婦別姓にも携わっている。

そんな中、本もよく読んだ。仕事関係の本はもちろん小説も。とくに海外物。中で一冊をと言われれば、「夜になるまえに」を挙げる。レイナルド・アレナスの自伝的小説であり、映画はこの秋、日本でも上映された。

四三年、キューバの小さな村に生まれた著者は、ホモのため政府の激しい弾圧を受け、八〇年アメリカに亡命。発症したエイズに死を覚悟し、劇的な人生を、魂をえぐり取るような筆致で描き切った。凄惨な投獄生活は、以下のように表現されている。

「モーロに着いたとき、ぼくはまだホメロスの『イーリアス』を持っていた。最後の詩編がまだ読まずに残っていた。それを読んでまわりのすべてを忘れたかったが、難しかった。閉じ込められている、もう野を走ることはできないということ、ぼくの体は受け入れようとはしなかった。頭が体を納得させようとしても、すさまじい暑さの中、南京虫だらけの二段ベッドに何ヶ月か何年か留まらなくてはならないということ、肉体は理解できなかった。肉体は魂よりも苦しむ。なぜなら、魂は思い出とか希望とか、しがみつくとべきものをいつも見いだすからだ。」

アレナスは海に魅入られた作家でもある。

「海は毎日、人を呑み込む」と祖母は言った。そのときぼくは海にぜひとも行ってみたいと思つた。初めて海を前にしたときのことをどう言つたらいいのだろう。その瞬間を描くことは不可能かもしれない。海、という言葉にしかかならない。」

山か海か、どちらかを選べと言われたら、私は躊躇なく海を選ぶ。海は心を解き放してくれる。ハバナのホテルで海からの貿易風に吹かれて午睡をとりながら、これまで味わったことのないほどの至福を覚えた。まさに表現できないほどに美しい、保養地パラデ口の海の色。その美しさを、キューバ人自身は知らない。独裁政権の下、居住移転をはじめ様々な自由が奪われているからだ。

自然を渴望する心に気づくとき、私は自分が忙しいのだと知る。「忙」は「心を亡くす」ことだ。その危険信号として、心は現実ではないロマンを希求する。自然、恋愛、芸術、その他。

先の「春秋」はこう結んでいる。

「こんなときは目先の動きばかりに惑わされずに、何が一番大事なのかをじっくり考えることにしよう。この二ヶ月、テレビの前に座り込む時間が多かったが、しばらくは本棚から古典でも取り出して読むのでもいい。いつまでも悪い話ばかり続くはずはない。」

そのとおり。日々の生活に追われるときほど、人は立ち止まり、道草を食うべきだ。う

んと深く呼吸し、失われそうな心を取り戻す。今年の連載の締めくくりに、サミエル・ウルマンの有名な詩「青春」の一節を贈りたいと思う。

「青春とは人生のある期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。……年を重ねただけでは人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。……人は信念と共に若く、疑惑と共に老いる。人は自信と共に若く、恐怖と共に老いる。希望ある限り若く、失望と共に朽ちる。……来年がますます幸せで充実した年でありますように。」

（元検事・現参議院議員 ささき ともこ）



著者略歴

五五年生まれ。神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月、参議院議員となる。九二年、推理小説『恋文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとくに』、『少年被疑者』、『告発捜査』、『日本の司法文化』がある。昨年一二月に『少年法は誰の味方か』（角川書店）が発行となった。

http://www2.tky3web.ne.jp/~tomoko/にて議員活動等を報告中。



女性検事が見る真実 捜査官へのヒント その⑤③

国語力

佐々木 知子

国会に来て三年半、かなり後悔していることがある。「ね、今日、国会議員(大臣)が本会議(委員会)でこんな日本語使ったのよ」。友人たちとの会食の席での格好のお笑いネタ。それをその都度書き留めておかなかったことだ。もちろん今も間違いはよくあるのだが、悲しいかな、もはや感性の鈍くなった我が頭はそれらを素通りさせている。

議員の質問を作るのは、党・政策秘書、あるいは議員自身である。結果として、内容がお粗末だったり誤っていることはままあるし、表現の誤りや誤読も多い。これが大臣の答弁になると、優秀な官僚が作成しているのだから内容はまずまずとしても、読み手の誤読は止められない。誤読防止のためには答弁書作成のついでに漢字にルビをふればいいはずだが、「これくらい読めるぞ。俺を馬鹿にするな」と怒られてはいけなさと躊躇するのもかもしれない。

国語や歴史は国会議員に必須の教養である。だから是非資格試験をという声もあり(タイは憲法で国会議員を大卒者に限っている)、それも一理あるが、やはり学歴不要、資格試験不要でいくべきなのだろうと思う。選ぶのはあくまで国民だし、誰であれ代表者になれるということがまた素晴らしいことだと思っただ。

ともあれ、昨今の国語力の低下は嘆かわしい。達筆にはとんとお目にかからないし、時

候のあいさつに始まるまともな手紙をもらうこともまれになった。理科に弱い算数の力が落ちたなど学生の学力低下が憂慮されるようになって久しいが、国語力の低下は中で最も憂うべき問題である。なぜならばそれは思考能力自体の低下であり、当然の帰結として他の学科の低下をも招くからだ。以前「日本人は劣化している」と書いたが、この現象と国語力低下は密接な関係に立っている。

言語は思考であり感性であり、それ故に最も大切な文化である。心に浮かぶもやもやとしたものを、それを適切に表現する術を知っていればこそ、思考となり感性となる。着物文化の日本にはかつて数え切れないほど色を表す言葉があったが、緑・赤・青といった言葉しか知らなければ色もそうとしかとらえられなくなる。形容詞としてただ「すごい」しか知らなければ、何を見ても「すごい」としか感じられはしないのだ。

検察を辞める直前、公判部で新任検事の指導をしていた。みな一流大学卒、司法試験合格、二年の司法修習を経て今や難関の検事に任官。選ばれたはずの彼らが事件の筋が読めないことに突然とさせられたことは、以前書いた。日本語も極めて低レベルだった。

法廷で、「遊興費」を「ゆうこうひ」、「同人」を「どうじん」と読み、あるいは「嚙下」を「吸引」と同義としている、等々。あざれた裁判官が後で、「最近では被告人も高学歴です

からねえ、あんな基本的な読み間違いをする馬鹿にされて何もしゃべってくれませんか」と苦笑していたものだ。

文章力も推して知るべし。「被告人は……、通りかかった通行人は……、駆けつけた警察官は……」と、一文に主語が複数の文章などざら。「あのね、『は』が主語でしょ、主語は一文に一つなのよ」と言いながら、むなしくなった。小学生のレベルではないか。これでは段落分けや接続詞をうまく使うなど、到底できるはずもない。

国語力が低いことと事件の筋が読めないこととは実は同じことなのである。国語(思考)ができないことで事象が的確にとらえられるはずはない。昔から言う。文字は人なり。文は人なり、と。作った文章を読めばその理解力は一目瞭然である。

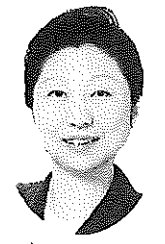
数学者・エッセイストの藤原正彦さんいわく、「小学校で教えるべきことは、一に国語、二に国語、三、四がなくて五に算数」。ITを教えるなどもつてのほか。国際化の時代、英語はできるに越したことはないが、正しい日本語で高度な英語が使えるはずがないことは簡単に分かることである。

周りを見渡して、国語のできる人はまず例外なく読書家である。〇×式の受験勉強しかしてこなかった人は日本語を使えず、その当然の帰結として、まともな思考はできず、文章も作れない。既に手遅れ状態の人も多いだ



ろうが、人生は長い。以後努力するのとしないうちでは大きな差がつくに違いない。「言葉」と言うのが、言葉は声に出してこそ美しい。歌、詩、短歌・俳句、小説の中で胸をつかれた箇所、そうしたものをどんだん音読し、その美しいリズムを体に覚えさせる。昔の日本の教育が四書五経など漢文の素読をたき込んだのは至って正しかったのだ。

こうしたこと女性たちの講演でよく話す。『どうぞ子どもさんには面倒がらずに絵本を読みな聞かせてあげてください』。多くの女性たちが私の講演でいちばん感銘を受けることの一つがそれであるという。



著者略歴
五五年生まれ。神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月、参議院議員となる。九二年、推理小説『恋文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとくに』、『少年被疑者』、『告発捜査』、『日本の司法文化』がある。昨年十二月に『少年法は誰の味方か』(角川書店)が発行となった。

http://www.2hky.3web.ne.jp/~tomokos
にて議員活動等を報告中。

生活の質

佐々木 知子

この正月は帰省せず、暖かい東京ですつと過ごした。

東京は全体にどこも暖かいが、私が今借りているマンションの暖かさは格別だと思ふ。高層階かつ東南の角部屋。これまで住居など雨露をしのげて荷物を置ければいいと、転勤による官舎暮らしにも何ら不満のなかった私だが、偶然にここを借りて以来、おかげさだがある意味で人生観が変わった。

とにかく温室並みに暖かいのだ。暖房はまらず不要、夏は夏で風通しが良いため冷房もあまり要らない。窓の外には空が広がり、開放感がある。家において快適なのである。起床してカーテンを開け、外に広がる青空を目にする瞬間。ぼかぼかとした日だまりの中、寝そべって好きな本を読むひととき。一日中家にいて十分に楽しいのだ。どうやら幸福とはこうした日常の生活にこそあるらしい。まさに「幸せの青い鳥」である。

気候と風土。それが人間の性格形成に大きな意味を持つことは従来指摘されてきたことだが、最近つくづくそうだと思うようになった。昨年初めて石垣島に行ったが、海の美しさもさることながら、冬でも暖かくからつとした気候に、こんな所で暮らせればと思つたものだ。寒い所はたまに訪れる分には情緒があつていいが、日常となるとやはり住み心地がいいとは言えないだろうと思う。

画家の友人(六〇歳代)が長らくアメリカで

暮らしている。奇麗でおしゃれな人だが、大方のアメリカ人と同様、そのもつぱらの関心

は「住」にある。七年前訪ねた自宅は、ブルー付きの一軒家が帰る朝、流してくれたマラーの「大地の歌」が、窓の外に広がる、折からの雨に煙る海と一体となり、それはそれは美しい絵のような光景だつた。それでもうさぎ小屋に慣れきつた私には「住」は無縁だつたのだが、ようやくその重みが分かるようになった。自分がくつろげる場の質を高めることは、生活の、つまり人生の、質を高めることなのだ。彼女はその後理想の家探しを続け、今年初め届いた便りには「ハンプトンの私のお城に遊びにいらして」とあつた。「是非行きます」と返事を出した。

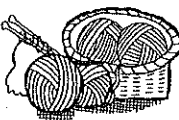
暖かいが、訃報続きの年末年始でもあつた。同僚議員の奥さんは急死の五日前、天皇誕生祝賀会でとてもお元気な様子だつた。続く元日夜、車の運転を誤つて転落・溺死した某県連幹事長は、年末、私の所に地元の特産だという「ざざれ石」を二つ、署名入りで届けてくださった。「年明け、または非が一緒に夕食を」と言う元気な姿を見送つたのがまさか最後になるうとは。二人とも六〇代後半で決して若くはないが、突然の別れは知る人の心に何らかの波紋を投げかけずにはおかない。

人生は、はかないものである。明日の自分、一年後の自分があることに、常は何の疑問も抱かずに生きている。だが、それは決して当

たり前ではないのである。明日生きているかどうかはだれにも分からない。だから「今」を楽しむ。楽しみは決して先送りにしない。そう人生観を変えたのだと言うと、友人が「それを利他的とも言う」とコメントしてくれた。それでは罪を犯す人の生き方と大差がなさそうだが、多分基本線は違うのだろうと思う。

多感だつた一八歳のころ、生き方を模索してたくさん本を読み、人の話を聞いた。中でも最も触発された言葉は、「人間は生れ、苦しみ、そして死ぬ。ただそれだけのことだ」(モーム著『人間の絆』)。ああ、そうなのだ、肩の力が抜けた。もつとも以後、やはり人間は最大限努力しなければいけないと思ひもしたが、何かの折によくこの言葉を心の中でつぶやいた。人生を生まれてからではなく終点から、つまり「残りあとどれだけ」で考えるようになった近ごろ、この言葉を人生の終着駅に近づきつつある者の悟りだと理解するようになった。年を取ることは、人生の無常を知ることであり、それゆえに生きていることは素晴らしい、そう思えるのだ。

年末、神戸で大学の恩師の古稀祝賀会に出席した際、還暦祝賀会以来会わなかつた某弁護士の変貌ぶりに驚かされた。当時仕事一筋のやり手で、正直苦手なタイプだつたが、五〇代後半になつた今、腰が低くなり、油が抜け落ちてまるで別人になつている。引退して第二の人生をどう考えるようになりました。山



著者略歴

五五年生まれ。神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月

が好きだから山小屋の番人になるか、詩が好きだから詩を作るか……。おそらくはあの後彼の身近にその人生観を変えるような出来事が起こつたのではなからうか。

死はだれにでも必ずや訪れる。人生は有限であり、無常である。それゆえにこそ宗教があり、芸術がある。限りある生だからこそ人との出会いに感謝し、日々の生活の質を高め、日常に起こるさ末な事をもいとおしむことが大切なのだ。正月に一念発起、三年半の間押入にしまったままだつた書類の整理をし、これぞかなり生活の質が高まつたと、いささか満足感を覚えている私である。

(元検事・現参議院議員 ささき ともこ)

参議院議員となる。九二年、推理小説『恣文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとくに』、『少年被疑者』、『告発捜査』、『日本の司法文化』、『少年法は誰の味方か』がある。
<http://www.2ky.3web.ne.jp/~tomokos>
にて議員活動等を報告中。



日本人のメンタリティ

佐々木 知子

S議員の介入はあったのか。その旨次官は外相に告げたのか。

通常国会で第二次補正予算案審議が始まった一月末のこと、アフガニスタン復興支援会議へのNGO参加問題をめぐって衆院予算委員会が紛糾、三者を聴取しても真相は藪の中だとして、首相は外相と事務次官を共に更迭、S議員は議院運営委員長を辞任した。

四月に就任以来、外相の失態は枚挙にいとまなく、外交停滞によって日本の国益は著しく害されてきた。不適格、直ちに更迭すべしとの論調が新聞・雑誌あまねく高まる中、外相を支えてきたのが首相だった。更迭すれば不適格な閣僚を任命した自らの責任が問われる。そもそもが二人三脚で作った内閣なのだ。「内閣一閣僚」の公約を死守し、問題の農林相らと共に小幅な内閣改造を年明けにすればとの妙案も見送られた。

外務省との対立が日増しに激化の一途をたどる中、今回の事態は勃発した。予算委で野党は退席、採決は与党だけで強行された。本会議でも野党は欠席、与党のみで採決。このままでは続く参院審議も異常事態となる。通常国会は始まったばかり、来年度予算案審議も各委員会での法案審議もすべてがこれからだ。国会正常化のために事態をどう打開するか。ここに至ってやっと首相は決断したのである。

そもそも組織の長が公に「部下が私に何も

知らせない」などと言い立てるのは自らの不適格を認めることになる。論争はさほどに低次元のレベルだった。普通は組織内で統一的な見解にならなければならない。ひとり外相の場合にはそのまま公に出てしまうのだ。組織の長は自ら招いた混乱の責任を取らねばならない。

細かい真相などより一日も早く新しい態勢で出直すこと、でなければ日本の外交はますます停滞し、国益を害する。だが、首相の決断の支持者は決して多くはなかったのである。よく知られるように、支持率は急低下。外相の根強い人気を見せつけることになった。そもそもなぜ人気があるのか、よく分からない。豪邸に住み、首相の娘として育ち、およそ普通の人ではないのだ。あるいは最近多額の脱税で捕まった某監督夫人と同じで、他人を思いやることのない毒舌に胸がすつとするのだとしたら、日本社会の病根もかなり深いのに違いない。

だが冷静に考えて、支持率の急低下には二つの別の要因があるように思われる。

まずは真相を究明せずにおざりにした首相への不信感である。日本人には真相究明を強く願う特質があることを、私は拙著『日本の司法文化』の中で指摘した。それ故に精密司法、つまり綿密な捜査、厳格な起訴、詳細な公判審理が要求されるのだ。その特質がここでもまた遺憾なく発揮された。事の真相

をうやむやにしないでほしい」と、マスコミはともかく、教養ある友人たちまでが口々に言うのには少なからず驚かされた。

そして、その後舞台を来年度予算の審議に移してもなお、外務省での言った言わないの低次元の論議が繰り返されている。今や日本経済はデフレスパイラルの危機にあり、景気回復や失業問題、食の安全確保など喫緊の課題が山積しているというのに、である。

もう一つの要因は、外相がこの度に限つていえば「いいこと」をしたからである。S議員の不当な介入で参加を阻止されたNGO(正義)に参加の道を開いた、これはいいことである。いいことをした外相を更迭させるのは悪いことで、そんなことをする首相は信用できないとなつて、支持率が下がるのは当然の成り行きともいえた。

勧善懲悪、判官びいきなどに代表される単純な「善玉」対「悪玉」の関係を我々が好むのは、それが安心できる関係だからである。我々の伝統的な社会では、異なる民族や言語文化、宗教による複雑な対立が存在しない。機密費に代表される外務省(悪玉)対外相(善玉)。不当に外務省に介入するS議員(悪玉)対外相(善玉)。時にこれは外見やしやべり方などで決められたりする。

だが、事は往々にしてそれほど単純ではない。事件を扱っていけばよく分かるが、両者共に悪いこともしばしばだ。あるいはその一



点だけを採り上げれば一方が悪くても、全体を見れば違うこともよくある。事はとらえ方次第、今回は外相がいいことをしたからこそ更迭ができた、つまり失態によって更迭すれば当然問われるべき任命責任が問われずに済んだとも考えられるのである。

ともあれ、組織の長たるものは決して部下の登用・配置を誤ってはならないという見本がここにある。万が一誤れば、逡巡することなく正さねば、自らかつ組織の死活問題となる。人気などしよせんは実体のないバブルである。要は実力とやる気。永田町を舞台にした生の人間ドラマ——ここにいると日々いろいろなることを考えさせられる。

(元検事・現参議院議員 ささき ともこ)



著者略歴

五五年生まれ。神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月

参議院議員となる。九二年、推理小説『恋文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとく』『少年被疑者』『告発捜査』『日本の司法文化』『少年法は誰の味方か』がある。

http://www2.tkyu3.web.ne.jp/~tomokosにて議員活動等を報告中。